
がんばれ元サラリーマン

クターの米

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

がんばれ元サラリーマン

【著者名】

クターの米

【あらすじ】

学校を卒業して就職後

ようやく3年経ち、仕事も生活も毎日が同じ単純作業の繰り返しになっていたある日

日常生活が非日常に変わってしまった。

第0話 始まり前の朝（前書き）

読みにくい！！

わかりずらい！！

文章がおかしい！！

つてかんじで「ゼコ」ますが何か問題でも（ひらきなおつ）
駄作ですが生暖かに田で見てやつてください

何か問題でもつて言つておいて

自分はものすゞく打たれ弱いので

「ツマンネー」「クダラネー」等

マイナスな感想は勘弁してください

プラス面の感想は「はい、喜んでー！」つてな感じですけど

みなさまよろしくお願ひします

第0話 始まり前の朝

P.iP.iP.iP.i · · · P.iP.iP.iP.i

「ふああ～あ

目覚ましの音で目を覚ました一人の青年が目覚ましに向かって手を伸ばした

力チツ

目覚ましを止めて寝ぼけた顔をサッパリさせるために洗面所に向かおうと起き上がり洗面所に向かった

顔も洗つて目が覚めた青年は台所で食パンをとりトースターにセットした後

ポットのお湯を使ってインスタントコーヒーを作りイスに座つてTVの電源をいれた

ザー・・・・・

「へ・・・・・

時計を確認すると何故か3時30分で止まっている携帯の画面も同じで、しかも圏外になつてている

カーテンを開けて窓の外を見よつとしたのだが

「まつくりでなにもみえない・・・」

普通ならぼんやりと周りが見えるし

街灯なり自販機なりどこかしら灯りがあるはずなのに
一切何も見えず闇と言つよりも絵の具の黒を窓全体に塗つたかの用に
何も見えなかつた

何があきたかまつたくわからない青年は窓の前で立ち廻くしていた時

TVの画面がノイズから真っ黒の画面に切り替わり

画面の中心に渦ができていた

渦はだんだん大きくなつていき何かを吸い込もうと引き寄せ始めた

「・・・・いつてーー」

ぼーっと立つていた青年はただ立つていただけなので

急に後ろの方から引っ張られる事で後ろに転がり頭を打つてしまつた

そして痛がつているうちにTVの渦に飲み込まれてしまつたのだった

第1話 始まりの日

草原の上で青年「宮沢 刀夜」(ミヤザワ ノイ)は田を覚ました

「あれっ・・・家で転んでたのに・・・どうゆうの?」

周囲を見渡して見ると草原から少し離れたところに街道らしきものが見えた

「とりあえず誰か人がいないか街道っぽいところを歩くしかないか・

・・・」

刀夜は立ち上がり街道に向かい歩き始めた

「部屋着にスリッパつて・・・こんな格好で知らない人に会つて不審がられるよなあ・・・」

今刀夜の格好はTシャツにスウェットパンツだから不審がられることは普通ならないのだが

足元がスリッパなのだ

「せめてサンダルならなあ・・・」

と、思考がどこかおかしく部屋での出来事、急に草原で倒れていたこと等不可思議な点に関して

無意識的に脳が考えることを否定して、できるかぎり今までの日

常で自分のいた日本のどこかだと

信じたがっていたのだ

「それにしても空気がいいなあ」

と、いまだに現実逃避しながら街道をテクテク30分程歩いていると、前の方から一人組みの男女が歩いてきた

刀夜は一人組みに話しかけた

刀夜「すいませーん、聞きたいことがあるんだけどいいですかー？」

二人組み男「ん、聞きたいこと?別にかまわないよ

刀夜「ここにひていつたいどこなんですかね？」

二人組み男「どこひて、オランジ村とオランジ山の間つてどこだね」

刀夜「オランジ村?どこですそれ?日本にそんな村ありましたつけ？」

二人組み男「日本?なんだいそれは、ここはラインハルト王国の端つこの方の田舎村付近だよ」

(ひょっとして・・・ドッキリ?・・・そんなわけないよな・・・
目の前にいる一人も剣とか弓もつてるしひょっとして・・・違う世界にきてしまったのか・・・)

二人組み男「それにしてもそんな軽装で武器ももたずにオランジ山に行くのかい?」

二人組み女「何か困つてるようだけどうしたんだい？」

（たぶん異世界から来ましたとか言つても信じてもらえないし頭おかしいやつだと思われるよなあ）

刀夜「記憶が無くて何故ここにいるのかもわからずには誰かと出会わないかと歩いていたんです」

二人組み男「それは大変だな、とりあえず一緒に村までいくか？一人で歩いてると危ないし」

刀夜「いいんですか！！ありがとうございます。お願ひします」

二人組み女「私の名前はマウアーよ、よろしくね」

二人組み男「ジャックだ」

刀夜「刀夜つて言います、よろしく マウアーさんジャックさん」

ジャック「呼び捨てでいいぞ、同じぐらいの歳つぽいしな、それにしても名前は覚えてたんだな、それ以外は何か覚えてないのか？」

刀夜「すいません、まったくわかりません」

マウアー「誤らなくてもいいのよ、とりあえず村に行つてゆつくりしたら思い出すかもしないし」

刀夜はジャックとマウアーと一緒に街道をオランジ村に向かって歩

き始めた

ジャック「それにしてもトウヤ、運がよかつたな

刀夜「何がですか？」

ジャック「たまたま俺たちが通りかかったからいいものの、その格好でオランジ山なんか行つてたら十中八九魔獸に喰われてたぞ」

刀夜「マジですか！」

マウアー「脅かすわけじゃないけどたぶんそうなつてたでしょうね」

ジャック「俺たちでも油断したら危ない場所だからなあ」

刀夜はジャックとマウアーと話しながら3時間ほど歩いた

ジャック「ここがオランジ村だ、刀夜一応聞くけど金持つてないよなー？」

刀夜「何も持つてないですねえ・・・・あ・・・・これって売れませんかね？」

刀夜は自分の左手につけている銀の指輪とちりちりにルビー等の宝石のついている指輪を見せた

マウアー「ーーそれって銀ーーもうひとつも銀にしかも精靈石までついてるじゃないーー」

刀夜「精靈石？ルビーとかエメラルドの事ですか？それにそんなに驚いてるってそんな価値あるんですか？」

ジャック「そんな価値って銀の指輪だけでも金貨50枚以上は間違いないし、精靈石のついてる指輪なんて値段がつけられないぐらいのものだ」

マウアー「こんな村じゃ売れるところなんてないわね」

ジャック（トウヤはビビンガの貴族か王族としか考えられないな、複数の精靈石をつけた指輪なんて初めて見たしな）

ジャック「まあ銀の方は売つても問題ないとおもうが売る場所がなんいんじゃどうしようもならんからな、一緒にラインハルト城の町まで行くか？途中にある交易が盛んな町でもいいし、そこで指輪を売つて金にするか途中でギルドの依頼を受けて稼いで返してくれるのなら両面の面倒はみてやるだ」

刀夜「そこまでしてもらつていいんですか！でも・・・わるいですよ」

マウマー「トウヤ・・・遠慮するのは礼儀としていいかも知れないけど、どうしようもできなにじゅうたいで遠慮するのはおかしいわよ」

刀夜「・・・面倒見てもらつていいですか？」

ジャックはニカツつと笑つと

ジャック「いやんと返してもひつから心配するな」と冗談っぽく言った

刀夜「ありがとう」

マウアー「とりあえず宿屋に行つてご飯でもたべましょ」

二人に連れられて宿屋に行き

初めての異世界での夕食を初めて出会つた人にお金やこの世界での
知識の面倒をみてもらい

初めての日を無事すごすことができた刀夜であった

第1話 始まりの日（後書き）

セリフばかりになってしましました（汗）
ちょっと書き方などを勉強してわかりやすいようがんばりますーー！

第2話ジャックの異世界講義

刀夜は目を覚ました

そこは、見知らぬ天井だった

「どい、じい？・・・つて一回目か」

と独り言をしていたとき

「ようやく起きたか、よく眠れたみたいだな」

ジャックに言われて外を見てみるとすっかり日も昇り前の世界で言うところの正午ぐらいまで太陽が昇っていた

それから食堂に行きジャックとの世界の生活等の常識を教えてもらいながら朝飯を食べていた

「まず、金のことだが、銅貨 銀貨 銀板 金貨 金板 の五種類があり銅貨10枚で銀貨1枚 銀貨10枚で銀板1枚つてかんじで10枚で一つ上の物と同じ価値になる。この宿屋が一晩で銀貨3枚飯が一食銅貨3枚つてところだな。一般的の農業とかで生活しているやつは一月だいたい銀板4枚あるかないかってとこだらうな」

（つてことは銅貨で100円か120円ぐらいってことが・・・金板つて一枚100万！！・・・それよりもただの銀の指輪で金貨50枚以上つて500万以上の価値があるのか・・・銀貨があるから銀自体に価値があるわけじゃない？どうゆうことだ？）

「一応見ておいたほうがいいだろ？右から銅貨　銀貨　銀板　金貨だな」

テーブルの上に置かれた銅貨や銀貨を見ていくと銀貨も金貨も全部が銀や金でできているわけではなかつた

「銀貨とか金貨って銀と金が少ししか入つてないみたいだけど・・・」

「

「それだけ価値があるのさ、銀には不死に対抗する力が込められているし金は魔力の底上げができるしな、もともと物々交換だったものを金を作つて交易できるようにするんだから価値の高いものでやらないと信用もできないし国が金を使えなくするとかしても銀や金が入つていれば別の国でも価値があるし、銀と金が入つてるから商人と普通に取引できるしな」

「なるほど、そういうえば一月つて何日で一月なの？あと年が変わるのは何月で？」

「月の欠けてから丸くなつてまた欠けるまでが30日それで一月だ、一年は8月でかかる、風水火光土雷氷闇の順番で変わつていくぞ、これは魔法の属性にあるものなんだが平民にはまずかかわりのないものだな、ハンターでも魔法をつかえるのは極少数しかいない、国の兵士でも魔法が使えるだけで隊長クラスだからな」

「魔法つて存在するんだ・・・でもなんでそんなに使える人が少ないの？」

「魔法を使うには精霊の力が必要らしいんだが、トウヤのもつている精霊石がないと使えないんだ、それに才能もいるらしいから自分

が使える可能性のある精霊石を手に入れたり精霊石を持つても才能がなかつたりと、まあ運がよければ使える用になるかもつてないじやあ俺も使えるかもしれないってことか・・・

「そこには専門家に聞くしかないな、どちらにせよ交易がさかんなラズベールの町に言つてみないことには何もはじまらんよ、ハンターのギルドもそこまで行かないとないからな」

「そりいえばハンターとかギルドつて何?」

「ハンターつてのは簡単に言えば何でも屋だな、ギルドつてところで仕事を斡旋してもらつて依頼をこなして金をもらつ。モンスターの討伐だつたり、薬草や鉱石の採取だつたり、護衛とかもあるぞ、家庭の草むしりとかお使いとかもあるぞ、トウヤもとりあえずギルドで身元の確認と登録されてなかつたら一応身分証代わりにギルドカード作つといったほうがいいぞ、いろいろ使えるからな、ギルドのある町ならギルドカードで買い物ができるし金庫もタダで貸してもらえるしな」

「何もなくても登録できるの?」

「おう、体の中にある魔力を感知してやるだけだし・・・といつてもよくわからんからそこらへんは、ギルドで聞いてくれ
飯も食つたし最低限の装備ぐらい整えるか・・・トウヤいくぞ」

「え・・・金ないよ」

「面倒みるつつたるー、遠慮しないでいくぞ、死なれてもこまる

から

「う・・・お願ひします」

刀夜はジャックにつけられて村唯一の道具屋にこへりとなつた

店に入るとゲームでみたようなものがこらへり置いてある。

ポーション、解毒剤、まんげつせり・・・

(こんなゲームじゃじゃねーかーー)

「何かあつたか?トウヤ」

「何でもないよジャック」

「とつあえず、ここにあつた服と靴に上からつける防具と武器あるか」

ジャックが店の主人と話しているとき、刀夜は隅の方で埃をかぶつている剣を手に取つた

するとその剣は突然光だし話かけてくる」ともなくぼりぼりのやびて使い物にならない剣だった

刀夜は「おぐんじゃねえよと思いながら元の位置に戻しジャックのところに戻つた

「トウヤ とつあえず服と靴に防具はあるみたいだから着てみる」

そういうわれたので着替えてみたらサイズはぴったりだった

「なんか」わざわざするなあ」

いつももこながりジヤックのといひこ突り着替えたことを伝える

「お、中々似合つてゐるが、武器はとつあえずショートソードベリーナ
しかないからこれでいいだろ?」

そう言って手渡されカバンも買つといたと一緒に渡されたのでスウェ
ットパンツをかばんに放り込んで道具屋をでた

ジヤックと話ながら宿屋にもどつた時

遠くから複数の音が村に近づいてきていた

第3話初めての戦闘

「ん？」

刀夜は遠くから何かが走つてくる音が聞こえ、その方向を振り返った

「トウヤ、どうした？」

「何か走つてくる音が聞こえないのか？」

「走つてくる音？」

「徐々に近づいてきている

ジャックと話していたそのとき、宿屋の一階の窓からマウラーが顔を出して叫んだ

「ジャックー！ハウンドの群れが村に近づいてる……」

「どのくらいこの数だ……？」

「15から20体ぐらい……！」

魔獣の中では最弱に近いハウンドだがまったく戦えるかどうかわからぬトウヤでは危険だと判断して置いていく事に決めた

「20ぐらくならいいけるなー！マウラー俺たちで蹴散らすぞ……！
トウヤは宿屋の中でもつとけーー！マウラーいくぞーー！」

そつぱうじとジャックはハウンドが来ている方に走り出した

後を追つて弓を持ったマウアーが走つていく

ハウンド：魔獸 狼に近い存在で農民の大人の男ぐらいなら平氣で殺せるぐらいの力は持つてゐる。一般的に魔獸は動物よりも危険で凶悪な存在なのだが熊よりも弱い
ハウンドの数が多いため被害が多いことから魔獸扱いをされてゐる

- side ジャック -

村の入り口の柵の外でジャックとマウアーはハウンドの群れを迎え撃つために戦闘の準備を整えていた

「そろそろくるぞ………来た！！ 援護頼む！！！」

そう言つてジャックは迫りくるハウンドの群れに向かつて走つた

ヒュン ヒュン

ジャックとハウンドがぶつかり合つ前にマウアーの射撃が走つてくるハウンドの顔面に突き刺さり、一体のハウンドを倒す

先頭のハウンドがいきなり倒れた事と前から走つてくる人間の気迫に一瞬ハウンド達はその場で停止した

だが立ち止まつた事により、一体マウアーの射撃の餌食になつてしまつた

ハウンド達は止まつてゐるが殺される事と遠距離から射撃をして仲間を殺された怒りによつて一斉に動き出す

ジャックは前から迫つてきたハウンドを袈裟切りに一閃

”ドチャ”

真つ二つに切り裂かれ血だまりを作るハウンド

一体・・・また一体と切り捨てていく

そしてマウアーの精確な射撃

ものの3分もたたないうちにハウンドは3体になつていた

そこでハウンドは逃げ出した

逃げ出した3体のハウンドはバラバラになつて逃げていく

逃げるハウンドに向かつてマウアーは矢を放つがさすがに三方向に逃げていくハウンドを倒すことは難しかつたらしく一體逃がしてしまつたところで戦闘が終了したのだった

- side out -

刀夜は最初宿屋の中でジャックに言われたとおり待つていよつと思つたのだが犬の吼える声が薄つすら聞こえてから気になり始め、宿屋の外で待つっていた

(ハウンドって犬？犬が魔獣とか言われるわけないか)

と考えていると

「うわー！！」

ジャック達が走つていった村の入り口とは反対の方向から悲鳴が聞こえる

刀夜は何事かと思い悲鳴がした方に向かって走り出した

そこには血を流して倒れている男の咽喉を噛み千切つていてる 1・5
メートルぐらいある狼がいたのだった

狼は今噛み千切つた人間は死んだと判断して自分の方を見て立ち止まっている人間に向けて走り出す

（狼に噛まれてる・・・あの人・・・死んだ・・・）

初めて目の前で人が死ぬのを見た刀夜はぼーっと立っている

人が目の前で死んでいたら普通はパニックになつたりするのだろう
が初めての死に加えて狼に咽喉を噛み千切られているというあまり
にも衝撃的な事が目の前で起きていたため刀夜は理解できずに啞然
としていたのだ

そんなぼーっとたつている人間なんて楽に殺せると一気に距離を詰
めるハウンド

迫りくるハウンドに目では見えているのに頭はまったく反応しない
刀夜

ハウンドは刀夜の咽喉に向かつて鋭い牙をさらしながら突っ込んで
くる

「あぶない！！」

突然大きな声が聞こえ刀夜の思考が現実に戻つてくる

「ああああああ！！」

咄嗟に咽喉をかばつた刀夜の左腕にハウンドの牙が刺さる

「いて――――――――」

あまりの痛さに刀夜はハウンドをはがそつと左腕を振る

”ブン ブン ブン ブン”

上空に振り下されるハウンドはたまらず口を空けて刀夜の腕から離れる
刀夜は元の世界では別段何か鍛えてたわけでもないので1・5メー
トルもある狼を ましてや噉まれている上体で振り回すなんて芸當
できるわけもないが

今は痛みと恐怖でそんな考えが思いつくはずもなく左腕の傷をかば
いながらジャックに買つてもらつた剣を構える

ハウンドは振り回された事には驚いたが刀夜の目が恐怖の色に染ま
つていることがわかると再度突撃をする

刀夜は迫つてくる狼があまりにも怖いと思い逃げたかつたが逃げれ
るわけがないと思い恐怖で目を瞑りながら精一杯の力で剣を振り下
ろした

振り下ろしていくと急に感触が重くなり最後には動かなくなつたの
で目を開いてみると

剣が地面に半分ぐらいい刺さつていた

田の前に狼の姿はなくどこいった?と思い周りをみて驚愕する

ハウンドは真っ二つに左右に分かれて後ろに倒れていたのだ

(どうなつたんだ・・・)

と想つてみると

「君すごいんだね、ぼーっとたつてたと思つたら急に腕でハウンドの攻撃をガードするし しかもハウンドに噛まれてゐるのに振り回すし 最後は真つ一つに切るつて！！」

「？・？・？おれ？」

「あたりまえじゃないか！ ハウンドを倒してくれてありがとう死んでしまつたあの人には申し訳ないけど、被害が少なくてたすかつたよ。」

「やっぱりあの人しんでたんだ・・・・・」

「こんなこと言うのはよくないんだけど 一人で済んでよかつたよ・・・前回ハウンドが村に来たときはもつとしんじやつたから・・・でも！ 君のおかげで被害も少なくて済んだし本当にありがとう！君とりあえず川にでも行つて返り血を流してきたほうがいいんじゃないかな？ 気持ち悪くないかい？」

「返り血？」

刀夜は自分の体をみて前全身ハウンドの血で真つ赤になつてゐるのを見て貧血になつて倒れてしまつた

「君！…どうしたんだ！…大丈夫かい！…」

村人は刀夜を背負い宿屋に歩いていった

ジャックとマウアーが宿屋に戻つてくる途中遠くから叫び声らしきものが聞こえてきた

「ジャック、聞こえた？」

「ああ、いくぞ！」

二人は一斉に走り出した

宿屋を通り過ぎ少しそすると何故か刀夜を背中に乗せた村人が歩いていた

「いつたい何があつたんだ」

「この方がハウンドを倒してくださいたのですが何故か気絶してしまつたので宿屋にお送りしようと思いまして」

「トウヤがハウンドを・・・俺の連れだから後はまかしてくれ、あと反対の入り口にハウンドの群れの死体があるから他の獣や魔獣が来る前に片付けておいてくれないか？」

「ハウンドの群れが来ていたんですか、ありがとうございます、あなたの方三人は村の恩人です、死体の処理ぐらいよろこんでやらせてもらいますよ」

村人から刀夜を渡して貰う時血まみれの刀夜を心配するマウアー

「ねえ、トウヤ怪我しない?」

「左腕を噛まれてましたが宿で消毒すれば大丈夫だと思いますよ、トウヤさんが起きたらみんなさん村長の家にきてくださいますか?」

「わかつた

「ええ」

「それでわ

ジャックは刀夜を背負いつと宿屋に向かって歩き出した

「それにしてもハウンドを倒すとは思つたよりやるな

「せうね、でもなんでこんなに返り血を浴びてるのかな~?」

「まあ起きたときには聞いてマウラーわらいんだだけトウヤの服買つてくれ

「わかつたわ、じゃこいつてくれるわね

ジャックはトウヤを背負いつ宿屋に、マウラーは道具屋に歩いていった

宿屋で消毒用の薬草を貰い部屋で刀夜の服を脱がし腕の消毒をして刀夜が起きるのをまつた

「あれ？なんでベットの上？何故下着だけ？」

「田覚ましたな、ほれっ」

服を刀夜に投げる

「とりあえずそれ着て食堂にきてくれ」

そつ言つてジャックは部屋をでる

刀夜は急いで服を着てジャックの後を追つた

「俺たちがハウンドを倒しに行つてる最中に何があつた？」

刀夜はベットで起きる前までの覚えていることを一人に話した

「・・・なるほど」

「そりあればあの人トウヤが起きたら村長の家に来てほしつて行つてたからいこうか」

三人は宿屋の主人に村長の家の位置を聞いて村長の家に向かつた

第4話戦闘後（後書き）

短くて申し訳ないです

少しずつ増やせていけたらいいと思っています

更新は1～2日に一話はしたいことおもつてあります

第5話異常な力

「ここの度は、村の危機を救つてくださつてありがとうございます。そちらの黒髪のお方、お怪我は大丈夫でしょうか？」

「平氣ですよ、おもつたよりたいしたことなかつたので」

「それはなによりです、それにしても村の外にあつた大量のハウンドはすこかつたですな、お三方がいなかつたらと思つとじやつてしますよ。

これは少なくて申し訳ないですがとつといてください」

そう言つて村長はテーブルの上に大きい袋と小さい袋と刀夜の剣をおいた

「これは？」

ジャックが代表して聞く

「状態のよかつたハウンドの毛皮と少ないですがお礼金です、後村の中で地面に刺さつっていた剣を持ってきておきました」

「ありがたく頂戴しておく」

「ありがとうございます」

「それと些細ですが夕食を食べていいてください」

そう言われ三人は村長の家で夕食を「こ駆走になり宿屋に戻つてこの

日を終えた

翌日二人はオランジ村からラズベールに向けて出発した

「とにかくあジャック、ラズベールつゝとこまでどれくらい掛かるの？」

「まあ途中で魔獣に襲われたりとか何事もなければ3日かかるだな、まあそんなことあるわけないんだが」「いや辺はハウンドがいるからよつぱん大丈夫だとおもつや」

「3日・・・つづ」とは野宿だよね？」

「「あたつまえだ（ドショ）」」

そんな風に話しながら歩いていると街道の脇からハウンドが飛び出してくる

「!!因か・・・マウラーは手を出さなくていいだ」

「了解」

「トウヤ村でも一匹倒してゐるんだ、ハウンドがりこ簡単に倒せると

うに練習だと思つて一体やつてみる」

「え・・・まじ?」

「まじだ、とりあえずコツを教えてやるから聞け、ハウンドは基本的に直進して飛び上がって喉を狙つて噛み付いてくるから飛んだ所をかわして斬ればいい」

そういうながらジャックは突つ込んできたハウンドを最小限の動きでかわしながら横一閃ハウンドを真つ一につにする

刀夜は剣を構えハウンドの突撃を待つ

残りのハウンド2体が刀夜とジャックに同時に飛びかかる

ジャックは先程と変わらずにハウンドを切り伏せる

そして刀夜の方を見ると何故かハウンドから4~5メートル離れたところで啞然としている

刀夜はハウンドの飛びかかりを何とか見極めて横に避けよつと跳ぶが何故か5メートルも跳んでいた

「あれ? 何でこんなに?」

そう考えていふうちにまたハウンドが突つ込んでくる

それをまた避けて斬る? とするのだがまたしても5メートルほど横に跳んでしまう

数回繰り返して感覚に慣れたのかようやくハウンドの攻撃をかわして更に自分が攻撃できる位置にいった

戦闘中にのんびり考へてゐる暇もなく今まで避けるときに物凄く自分が跳んでいたことも忘れて全力で剣を横薙ぎに振るう刀夜前回一回だけ振つただけのど素人でしかも、剣の柄は丸いのでうまく刃を向けれなかつた刀夜は剣の腹でハウンドを野球のボールの如く吹つ飛ばした

「あの体で「すごい馬鹿力だな（だわ）」

ハウンドは街道から20メートル程離れた木にぶつかり死んだ

「俺なんでこんなに力があるんだろう・・・」

刀夜は元の世界では、そこまで力のあるほうではない。
というか普通というのが似合う人間だった。

身長は172cm 体重60kg ガツチリしているわけでもない
なのにハウンドを20メートルも飛ばす力は以上なものだった
「まあトウヤ、力が強いのはいいことだが剣の振り方を覚えたほう
がいいな、剣がすぐにダメになつてしまふからな」

「うん」

刀夜は自分の身体能力が以上に良くなつてゐる不思議は生き死にがかかるこの世界で良いほうに働いてゐるのでとりあえず良としておくことにした

それからじしまく歩いた後昼飯を食べてジャックから剣の持ち方と剣の振り方等を教えてもらい体感で30分程素振りをしたところでまた町に向けて歩き始めこの日はそれ以降2回程ハウンドに襲われたところで日が落ち始めたので野営の準備を始めた

が、刀夜はもちろん初めての事なので何をしていいのかわからないのでジャックとマウアーにどうすればいいのか教えてもらひながら初めての野宿を体験するのだった

第5話異常な力（後書き）

みなさん読んでくださってることにありがとうございます
ニューヨークアクセスも1000を超える温かい感想もいただき嬉しく感
動しているじだいでござりまする

これからもがんばっていきますのでよろしくお願いします

第6話間接的人殺し

日が昇る前に刀夜は目を覚ました

「トウヤもう少し寝てもいいのよ」

「いや、なんか日が覚めちゃったからマウラー少し寝てもいいよ」

「そう？ それじゃあトウヤに甘えさせてもうつわね、日が昇り始めたら起こしてね」

マウラーはその場で横になり矢筒を枕に寝始めた

刀夜は固まつた体をほぐす為に軽いストレッチをした後焚き火に昨日拾つておいた木の枝を放り込んで火の勢いを調整した

横に置いてあるショートソードを眺めながら昨日ジャックに教わった動きを思い出しながら素振りや足捌きを練習しようと思ったが一人が起きてしまう可能性があつたのでイメージトレーニングをしながら日が昇るのをのんびり待つていた

日が昇りジャックとマウラーを起こし固いパンを食べ焚き火を消したりと後始末を済ませて歩き始めた

街道を歩く三人、昨日と違ひハウンドにも遭遇せず順調に町へ進んでいき何事もなく一日田を終える

オランジ村をでて3日目

この日も順調に歩きラズベールまで後2時間ぐらいの距離まできていた時、馬車と馬に乗った護衛4名とすれ違った

馬車の御者は小奇麗な格好をしているが馬に乗った護衛らしき人は無精髪を生やし服装も動きやすそうではあるがぼろぼろの物を着ている

なのに馬に乗っていると刀夜は不思議に思つて眺めていると護衛らしき人におもいきり睨まれてすぐに田をそらしていったが何故か女子の泣き声が聞こえた

街道の周りは草原になつてるのでどう考へても馬車の中しかありえないと考へているうちに馬車が横を通り過ぎていく

ジャックの近くに行き小声で話しかけた

「ジャック、あの馬車から女子の泣き声が聞こえたんだけじ・・・。
・」

「本当か？俺には聞こえなかつたが・・・まあ村でハウンドの走つてくる音を聞き取つた刀夜が言つのなら本当なんだろつな、よし力マかけてみるか」

そういうつて通り過ぎた馬車のほうに行き声をかける

「悪いんだがちょっとといいか?」

「なんだ?」

無愛想に答える護衛らしきものの

「ラズベールで最近女を攫つて儲けてるやつがいるらしいんだが何か情報持つてないか?」

ジャックがそう言ったとき護衛が足を止める

「そんな話しらないな

そういうながらその護衛は他の3人に田配せをする

それをジャックは見逃さず当たりだと思い瞬時に駆車に近づき駆車の幌を斬る

斬つた隙間からは女の子が数名見えた

「おこ向じてやがる……おこ、ここつらがつはうむ……」

そう言われて動搖している刀夜に向けてジャックが言つ

「トウヤはマウラーの後ろに下がれ……」

刀夜は女性の後ろに隠れることを恥じていたが自分が何もできないと思いつマウラーの後ろに下がる

下がつてからジャックの方を見るとすでに一人切り伏せている

マウアーもすでに一人をしとめていた

「ちい・・・ずらかるべーー！」

そういうて馬に乗った残りの一人は逃げて行き

馬車も逃げようとするがすでにジャックが御者を蹴落とし馬を落ち着かせて止める

血溜まりのできた死体の横を平気で歩いていくマウアーに対しても夜は口を押さえながらできるだけ見ないようにながらマウアーの後を付いて行く

二人が馬車にたどり着くときには馬車の向きをラズベールの方に戻しジャックは待っていた

「マウアー、中にいる子達に事情を説明して中に何もなければ幌の天井を切つて女の子の肌を隠すのに使つてくれ、トウヤは俺と一緒にこい」

ジャックに連れられ死体の所に戻る

「トウヤ、目を逸らすな、俺だつて死体を見るのなんて好きじゃないがやらなければやられると覚えとけ、元々トウヤが気が付かなければこいつらは死ななかつた」

うつむき震えている刀夜にジャックが言つ

「別にトウヤを責めているわけじゃないんだぞ、こいつらはあの馬車にいる女の子たちを自分たちで犯した後人を売つたりするような連中だ、人だつてかなりの数殺したりしてるだろう、トウヤのおかげで罪もない女の子が救われたんだからな、同情するなとは言わないが気にしそぎて何かが変わるわけでもないんだ、できるだけ割り切れるように努力するほうがいい」

そういういながらジャックは死体をどかし馬車の道を確保して馬車に戻る

「マウアー大丈夫か？」

「ちょっとまって・・・・・いいわよ

「マウアー後ろの幌を切つて中から後方を警戒しといてくれ、トウヤは俺と一緒に御者台で左右の警戒を頼む」

刀夜とジャックは御者台に乗りこみラズベールに向けて馬車を歩かせた

第7話ラズベール到着

馬車で進みラズベールの門についた時衛兵が十数人で馬車を囲んだ

「止まれ！！」

馬車を止め衛兵の話を聞く

「あれ？ ジャックさんじゃないですか！！ 今日の昼過ぎに人攫に数人誘拐されたのですがここにくる途中でジャックさんの乗ってるような馬車を見ませんでしたか？」

「それなあ、この馬車だ」

「へ？・・・本当ですか！！」

「マウアー中に何人いる？」

「5人よ」

「とりあえず5人分の服を持ってきてやつてくれ」

「わかりました！！ 誰か服5人分と女性隊員つれてきてくれ」

囲んでた衛兵の内の一人が走っていった

服等を待っている間にジャックは衛兵に状況を説明していた

話終わつて少しすると女性隊員と服を持った隊員がやつてきた

「それじゃあ後の事は頼むぞ」

「ありがとうございます、あとでお礼に伺いますのでいつもの宿でいいですか？」

「ああ、でもとまあえずギルドに行つたりやることがあるから宿でいくのはちょっと後になるぞ」

「わかりました、少し後で行きますね」

衛兵に後のこと任せ町に入った

町の作りは四角で周りを壁で囲んであり4方向に門があり大通りが十字に門から門まであり

大通りは店が連なつていた

刀夜はキヨロキヨロと周りを物珍しそうに見回つていた

「トウヤとりあえず飯食いに行くぞ」

ジャックとマウアーの行きつけの店に連れて行つてもらい遅い昼飯を食べに行つた

カラソカラソ

「あら、お久しぶりねジャックさんマウアーさん、横の男の子は初めて見る顔ね」

「オランジ山にギルドの依頼で行つてた帰りに拾つたのよ」

「マウアーさん拾つたって・・・」

とりあえず席に座りジャックが適当に注文をする

ジャックに刀夜は耳打ちする

「あの人すごい美人だね」

せっかく小声で言つたのにジャックが大きい声で話す

「マウアー、トウヤがエレナに一目惚れしたらしきや

「そんなこといつてないじゃないか！！」

そんな風に刀夜がからかわれているとエレナさんが料理を持ってやつてきた

「はい、おまかどりさま～」

「おっがとよ、わうわうエレナ、トウヤがエレナに一目惚れしたつてよ」

「トウヤ君つていつのね、よろしくね」

そういうて笑顔を向かれて少し赤くなつてしまつた刀夜をからかいながら三人は食事を楽しんだ

第8話 ギルド登録（前書き）

毎度よんでもぐださつてありがといわざれこまわ

またもや短いです申し訳ない

第8話 ギルド登録

食事をした後マウアーは宿をとりに行き
ジャックと一人でギルドに行くことになった

ギルドは中々の大きさで体育館ぐらいの広さをしている

ギルドの中は元の世界の銀行や郵便局のような作りになつており窓
口が沢山ある

窓口の上に看板がぶら下がつていて「新規」「受注」「依頼」「報
告」「預かり」「引き出し」の6つに分かれており新規以外の各場
所は2人ずつ対応を行つてている

「トウヤは新規の所に行つてあとは係りの人間に聞いてくれ

「そういつてジャックは別の窓口にいつてしまつた

「すいません、初めてなんですか?」

「こんにちわ、新規の方ですね、登録でよろしいですか?後ギルド
について等説明は必要ですか?」

「お願いします」

「でわ先に登録から済ませますね、まずこの水晶に手を良いと
まで乗せてください」

刀夜は田の前に置いてある水晶に手を乗せる

手を乗せると水晶が発光し10秒ほどした後元に戻った

「はい、もういいですよ

まず、ギルドのランク等から説明致します、ギルドランクとはS・A・B+・B・B-・C+・C・C-・D・Eの順番でランク分けされています、Sが一番上でEが一番下です、最初はEから始まりますランクが高ければ高いほど報酬が高いが危険な依頼を受けることができます

ランクは依頼をこなしていくと上がっていくします、自分のランクの依頼を5回か一つ下のランクの依頼を20回成功させると上がります。

依頼はランク別の掲示板がありますのでそちらで自分の受けたい依頼の紙を剥がして受注の窓口にいってください、そこで依頼を引き受ける最終確認と諸注意等を受けて依頼を達成しに行っていただきます。

依頼を終えて戻ってきたら報告の窓口に行き手続きをすませたら報酬を貰つておしまいです、ランクが上がって報酬が多い場合は報告後自動的にギルドの預かり所にて預からせてもらい、必要であれば引き出し窓口で引き出してもらいます

どこの窓口でもさつき手を置いていただいた水晶がありますので最初に手を置いていただきてその後は指示に従ってくださいこれに手を置くことによってランクや依頼内容等の確認を行いますので。

先ほど言いました預かりや引き出し等は金貨や金板などは無料で預かりをさせていただいております

道具に関してはギルド管理の倉庫を有料でお貸ししています
貨幣はどこかのギルドでも預かり引き出し可能ですが、依頼の報告も可能ですが依頼の場合は普通同じ場所でませますがランクがBから

上になると複数個の依頼の受注が可能なのでそのときに依頼を受けた別のギルドで報告を行う場合もあります

貸し倉庫は月単位での支払いになり月の替わりに自動で引き落とす
か五日以内に預かり窓口にお支払いいただければ更新されます
ただし引き落としや五日以内にお支払いいただけない場合ギルドで
処分いたします

これでギルドの説明は以上です、よろしくですか？

「ありがとうございます」

「一気に説明をしたのでわからなことがありますれば聞きときてください」

刀夜は説明を聞き終えてジャックを探し歩いていると報酬窓口から
歩いてくるジャックを見つけた

「トウヤ登録終わったか？」

「説明も聞いたし大丈夫だよ」

「じゃあ衛兵のやつらも来る頃だし宿にこぐぞ」

ギルドを出て宿に向かい歩き始めた

宿屋につくと衛兵が一人入り口で待っていた

「ジャックさんとトウヤさんですか？」

「そうだ」

「隊長が本日の件での事後処理の報告とお礼をとの事で食堂に来ていただきたいそうです」

「わかった」

短いやり取りをして一人は食堂に入る

するとそこには女の子が5人と女の子の親らしき人達、後は昼間ジャックと話していた衛兵とその部下らしき人が一人にマウラーがイスに座っていた

「遅くなつてすまないな、それにしてもずいぶん人がいるんだな」

ジャックがそう言いながらマウラーの横に座ったので自分もイスに座る

「いえいえつさつきましたところなので、こちらのみなさんは今日の件で助けてもらつた方々がお礼を言いたいとの事だったので一緒に来てもらいました。」

「私達の娘を助けていただいてありがとうございます」

泣きながらお礼を言つてきた母親や父親達に向けてジャックが言つ
「礼なら横にいるトウヤに言つてくれ、ここがいなかつたら氣が
つかなかつたからな」

そう言つとみんな刀夜に礼を言つ

刀夜があたふたしてこのを見渡すジャックとマウラーが笑つて
いる
それを見て苦笑した衛兵が助け舟を出した

「みなさん三人も今日は疲れているし娘さんがたも疲れていると思
うので家でのんびりしてください」

そう言われて女の子達の親は帰り際に「是非食事に」「娘の婿にな
つてくれませんか」等いろいろ言いながら帰つていつた（もちろん
刀夜をメインとして）

刀夜は親達の相手から解放されてくたくてになりながらイスに座る

「おうトウヤ人氣者だな

「ジャックのせこじやないか！？」

「でも事実だしなあ～」

そう言つてると衛兵が咳払いをする

「お話中すいませんが事後報告をまずしますね、ジャックさんに聞いたとおりに街道に行つて死体を回収してきまして調べたところ、隣の国で有名な”霧の団”だと思われます、肩に団の印の刺青が入つていてるので間違いはないと思いますが霧の団の振りをしている可能性もあるのでもう少し調べてみる予定です。それなりに大きい組織なので三人とも報復には気をつけてください、隣国との関所に連絡はしてありますが捕まるかどうかもあいにくわからないので、それと馬車はどうしますか？一応守備隊の方で預からせてもらっていますが」

「とりあえず必要ないから売つてしまいたいな」

「それでしたら守備隊に売つていただけませんか？」

「トウヤいいよな？」

「かまわないよ」

「金板2枚と金貨5枚でよろしいですか？」

「妥当な所だな」

「それでわ金板2枚と金貨5枚で、後事件の協力と女の子の親達かららの礼も含めて金板3枚お渡しします、金板だと迷惑かと思つて一応金貨で持つてきましたので確認してください」

隊長の部下が三人の前に金貨の入つた袋を置いていく

三人が各自目の前に置かれた袋の中身を確認する

三人ともしつかり金貨10枚入っているのを確認して入っていたことを伝えると

「今回の件本当にありがとうございました、そういうえばトウヤさんは名乗っていなかつたですね、ラズベール守備隊隊長のライズ＝パラ＝パンクラスと言います、ライズと呼んでください、それでわ

刀夜とライズは握手をした後、ライズは部下を連れて帰つていった
「ジャック、装備とかで掛かつたお金返しつくよ

「その分はオランジ村でハウンド退治の時にすでに返つてきてるし
トウヤのおかげで金貨10枚も手に入つたんだ

そう言ってジャックは笑いマウアーが「飯にしようと言つたので
三人はそのまま食堂で談笑しながら夕食を食べ、食べ終わると刀夜
は眠くなつてきたので部屋に戻り寝た

第10話 一人との別れ

朝になり目を覚ました刃夜は備え付けの水桶で顔を洗い目を覚ました後部屋を出て食堂に向かった

「マウアーおはよう

「おはようアリス

珍しく一人で朝食を食べているジャックがあぐびをしながら食堂にやつってきた

「眠そうだねジャック」

「ああ、あの後気になつたことがあつたからライズのところにいつてきたんだが飲みに付き合わされて寝たのが遅かつたんだ」

「それにしてはちゃんと起きてくるね」

「まあ、習慣だな」

二人は朝食を食べ終わつており談笑しているジャックが

「トウヤこの先どうする?俺たちはやることがあるから今日にでもラズベールをでなきやならないんだが」

「え、そつか」

「まあ俺からの助言としてはとりあえずラズベールでギルドの依頼をこなして剣の使い方や物価になれてある程度自分でやつけるように力をつけてからどうするか考えたらいいと思う
金貨10枚も持つてるから住むところはここを何ヶ月か単位で借りてしまえばいいしな」

「そうだよね、まず自分である程度できることにならないとダメだよね・・・
わかったここでがんばってみるー」

「マウアーすぐにできるで

「わかったわ

二人は部屋に戻つていき荷物を持つて入り口まできた

「二人共ありがとう

「気にするな、それじゃあトウヤまたな

「またねトウヤ」

一人と別れた刀夜は宿の主人と話をしようと思い主人を呼んだ

「すいません、とりあえず金貨2枚でどれくらい部屋を借りりますか?」

「金貨2枚ですか?それだと5ヶ月ですね」

「じゃあこれでお願いします」

宿の主人に金貨を2枚渡して契約をすませてこれから自分がどうするか考えるために部屋に戻った

刀夜は部屋に戻つて剣を腰に付け部屋をでた
とりあえずギルドで自分のできる簡単な依頼を探そとギルドに向かつて歩いていたが武器屋と防具屋があつたのでよつてみることにした

「いらっしゃい」

店内に入ると武器屋と防具屋はくつついており半分ずつ別れている
ようだつた

オランジ村とは比べ物にならないほど色々な物が置いてある

「お兄さん何探してんんだい？」

防具屋の主人にそう聞かれたので答える

「特にこれといつて決めてるわけじゃないんですけど」

「おせつかいかもしれないけど最近盗賊とかが増えてるから皮製より鉄製の防具にしたほうがいいとおもつがね、皮製だとたいした腕じゃないやつの突きでも関係なく貫かれるからね」

「せうか・・・とりあえず動きやすい感じの物があつたらいいんですけど」

「やうだねえ・・・ちょっとまつてな」

防具屋の主人はいくつか防具を持つてきた

「動きやすい物でだとこんなところだな」

机の上に置かれたものは胸当て、鎧帷子、脛あて、鉄甲

「間違つてたらすまんが、君はまだギルドの駆け出しつてとこだね」

「そうです」

「本当なら鎧とかの方がいいんだが、なれないもので動きを制限されるのがいやとなるとこの程度の物になるな、肌着の上に帷子を付けて上から服を着て胸当てだな、脛あても服の上からそのまま付けるものにした、足首も曲がるように加工してあるものだ、ただ少し高いがな、鉄甲は内側に皮を付けて殴つても手に負担のかかりにくこよじしてある」

「ちょっとつけてみていいですかね?」

「かまわんよ」

刀夜は全て身につけて足の動きや鉄甲を付けた状態での剣の振り等を少し試した

「いいですねこれ、全部でいくらですか

「駆け出しに買えるかどうか実は難しいところなんだが金貨2枚と銀板5枚だな」

「わかりましたこれでお願いします」

「金持ちだな……まあいい装備しないで死んでしまつようついわな、この皮製のビーツある？ 一様銀板一枚で下取りしてやれるナビ」

「それじゃあおねがいします」

金貨を3枚渡して銀板を6枚もらつた

「セツニエバショートソードしかもつてないのか？」

「はい、何かまざいですか？」

「まざいといえまざいがまづくないといえまざくないが
もしショートソードが折れたりしたときに困るからナイフとか何か
もう一個持つておいたほうがいいと思つた」

「なるほど……色々教えてくれてありがとうございます、横で探
してきます」

「ここにひととよ、いつかこりやありがとな」

横の武器屋に移動する

武器屋の方はなんとなく知つているものがいっぱいある

短剣、剣、槍、斧、弓、ボウガン、鎌、棍棒、フレイル等他にまい
ろこりなものが置いてある

刀夜は色々と眺めて「ふと思いつく」ことがあった

「ちりにきて自分の身体能力があがっているので両手剣みたいなでかいものでも持つて振り回せると思つたのだ

壁にたてかけてある大剣を持つてみる

やはり身体能力が上がつて「らしく軽々と持てた

「君す」い力だなともそれを持てるようには見えないが

「他に似たようなものないですか？」

「似たようなものなあ・・・あ・・・あるぞ、そつちの奥の剣に隠れてるもんがあるぞ」

探してみると大剣と同じような自分の身長と同じぐらいの剣の柄のある鉄の棒があつた

「それなら対武器にも使えるし魔獣相手でも使えるぞ、手入れもほとんど必要ないしな」

「これいいですか？」

「そんなもの欲しがる人間がいると思つていなかつたからなあ、銀板一枚でいいよ金貨一枚で胸当ての後ろにその鉄の棒付けるよつにしてやうつか？」

「お願いします、あとこの短剣が欲しいんですけど」

「それと合わせて銀板6枚だな」

防具屋のおつりの銀板6枚と金貨一枚と胸当てを渡してしばりへ待つた

「できたぞ、つけてみてくれ、鉄の棒の付け方ははよりひ背中の真ん中に押し当てるよりひするとかいで固定される魔法具をつけてある」

胸当てをつけてみて鉄の棒を肩口から斜めにし背中に押し当てる

「手はなしてみな」

手を離してみるとしつかりへついていて落ちない

「でもこれははずすときはひづるんですか?」

「ある程度の力が加わると外れるから何かにつつかつて取れるときもあるから注意してくれ」

力が強くなつてゐるので案外簡単にはずせたが実際は片手ですんなりとれるものではないらしく背負ひようにして肩を支点にして両手で引いてそのまま一撃を全力で喰らわせるらしい事を聞いた

装備を整えて所持金が金貨5枚になつた

店を出て今度は道具やに向かつた

道具屋ではウエストポーチみたいなベルトと肩にかけれる袋を買い解毒の丸薬と傷用の塗り薬に包帯と店の人々に頼んでそろえてもらつ

たものウェストポーチに入れる

店を出たころには日も落ち始めていたのでギルドにいくのをあきらめて宿に戻った

第1-2話依頼の受注

昨日は装備を整えたり道具を買ったりして遅くなってしまったので今日はまっすぐギルドに向かう

ギルドの中は相変わらず人が多くそこそこ騒がしい

掲示板を見に行く前に手持ちの金貨を預けることにした

「預かり」看板の窓口に行き水晶に手を置く

「金貨を4枚預けたいんだけど」

「はいわかりました、もう一回水晶に手を置いてください」

「もういいですよ、お預かりしているのは全部で金貨4枚です」

礼を言つてEランクの掲示板に向かう

掲示板を眺めているといくつか自分ができそうなものがある

(“依頼人 場所 内容 報酬 備考”)

”ギルド連合 ラズベール周辺 ハウンド退治 ハウンド一休銀貨8枚 詳細は窓口まで”

”ラズベール商人連合 ラズベール内 道具・防具・武器屋等配達一日銀貨3枚+歩合”

”ラズベール防衛隊 ラズベール内 夜の町見回り 一日銀貨5枚食事あり 詳細は窓口まで”

刀夜は悩むが昨日装備を新しくしたのだからと思いハウンド退治をすることにした

「受注」窓口に行き水晶に手を置き掲示板の紙を渡す

「ハウンド退治ですね、ハウンドの尻尾が証明部位です、何体でも
かまいません、3体につきギルドのランクポイントが一加算されま
す、どうされますか?」

「お願いします」

「でわ水晶にてを置いてください・・・いいですよ、部位証明用の
袋使われまか?」

「はい」

依頼の手続きを済ませて袋を渡してもらいギルドを出で

ラズベールに来た時の入り口に向かった

途中でどれぐらいの時間かかるかわからないので干し肉と水を買つ
ておいた

入り口の検問を通過のとき腰をかけられた

「おはよウジヤリサマサウテウヤセん」

「あ、おはよウジヤリサマサウテウヤセんライズセん」

「今日せびつしたんですか？」

「ギルドの依頼でハウンド退治に行こうと頼こまして」

「それならこち側じゃなくて反対側から出て少し歩いて右手側にある森付近ならそここりますよ、森の中に入ると急に数が増えるので森の手前で狩るのがここと思こますよ、後これをビーブ」

「こねは？」

渡されたのは何かの金属板、元いた世界では見たことが無いものだつた

「ラズベールの通行手形みたいなものです」

「あつがとうござります、行つてきますね」

「お気をつけ」

ライズと別れ反対側に向けて歩く

反対側の検問で先ほどもらった金属板を衛兵に見せる

「じつでお通りください」

他の人はそれなりに時間がかかるらしいが刀夜はライズのおかげですんなり通ることができた

第1-2話依頼の受注（後書き）

中々すすみませんが
じわじわ書いていくので気長にお願いします

第1-3話脅威の力

ラズベールの門を出て街道を30分ほど歩いたところで右側の森付近に気配がある

刀夜が気配のするほうに近づいていくとハウンドが飛び出してきた

刀夜は右に跳ぶ

5m程横に跳んだ後ハウンドを確認して背中の鉄棍棒を構える

構えたところで既にハウンドは刀夜に向かって走ってきていた

刀夜は一回のハウンドとの戦闘と自分の力によつて戦い方を見出していた

ハウンドが跳んできた所を野球の感覚で鉄棍棒を振りかぶつて打つ
といつたつて単純な方法だ

ハウンドの跳んだタイミングを見計らつて鉄棍棒を振る

刀夜の強化された腕力により鉄棍棒のスイングが物凄いことになつていてあたつたハウンドの頭は血を飛ばしながらちぎれ飛んでいった

だが力が強すぎて弾き飛ばす力よりも破壊の力が強かつたせいでハウンドの頭のない胴体が走ってきた勢いのまま刀夜にあたつてしまつた

「ここで」ハウンドに当たった事により油断していた刀夜はバランスを崩して倒れてしまつた

そこに森から5体のハウンドが刀夜めがけて走つてくれる

それを見た刀夜はあわてて立ち上がる

立ち上がった所すでにハウンドが牙をつきだして跳んでくる

最初と同じように刀夜は横に跳んで距離をとりながらかわす

武器を構えたいがさつき倒れたときに鉄棍棒を離してしまつていた為仕方なく腰のショートソードに手をかけようとするとハウンドの5体のうち2体は時間差できていいた為刀夜がよけるために跳んだ時瞬時に方向転換をして近づいてきていた

鞄から抜くよりも早くハウンドが跳んできたためあわてて横に跳んで避ける

そうすると今度は最初にきていた3体が跳んでくる

それもなんとか回避するがじこのままだとじり貧だと思い2体が跳んできたときに鉄甲で片方を防ぎもう片方を殴り飛ばすがガードしながらなので踏み込めないと振りぬけないとダメージはほとんどない

そしてまた3体が突つ込んでくる

(やつぱり武器を使わないと倒せないよなあ)

そう思いながら避け続ける

そこで気がつく

(横に避けるから次がすぐにこれるんだ!)

刀夜は横に跳んで避けるのをやめて上に跳ぶ

上に跳んだことにより攻撃をしてきたハウンドの2体が刀夜を見失う
横に避けたところを攻撃しようと思っていた残りの3体はその場で
止まり刀夜の跳んだ上を見る

刀夜は跳んだ後ショートソードを鞘から引き抜き上段に構え地面に
着地しながら近くのハウンドに向けて振り下ろす

ドン といつ音と地面を沈めた場所から近くにいたもう一体のハウ
ンドに向かって走りハウンドを真つ二つに切り裂く

残りの三体の方を向く刀夜

三体はタイミングをずらして刀夜に襲い掛かるように一列になつて
走っていく

それがまずかつた

刀夜は最初の一体を軽くかわしてそのまま斬る

斬つた後回し蹴りを放ち一一体目を弾き飛ばす

三体目は一体目を弾き飛ばした蹴り足をそのまま戻す形で踵で逆方向に弾き飛ばした

一体目は鉄製のガードのついた蹴りなので死んだが三体目はかるうじて命をつなぎとめていた

刀夜は近づいていきなんとか生きているハウンドの頭にショートソードを突き刺して止めをさした

第14話初めての依頼完了

ハウンドを倒した刀夜はショートソードを振りハウンドの血を飛ばして鞘にしまつ

途中で落とした鉄棍棒も拾い振つて血を飛ばそうとするが少し乾いていて飛ばしきれない

血を飛ばすことを一旦諦めてハウンドの証明部位の尻尾をナイフを使つて切つていきた本の尻尾をギルドでもらつた袋に入れておく街道沿いにちよつびいい大きさの岩が見えたのをそちらに向いていき休憩しようつと思つていた

森の方を背にして歩いていく刀夜に気がつかれないようこむつくりだが確実に距離を縮めていくものがいた

刀夜の以上にあがつた聴力により刀夜は後ろから気がつかれないよう迫つて来る一体のハウンドの存在に気がついていた

気がつかれてないと思つてゐるハウンドは残り5mぐらいのところで人間を食べる事への食欲が我慢できなくなり刀夜に向かつて走り出す

刀夜は後ろのハウンドの動きが走つた途端に尻尾の入つた袋を下に落とし鉄棍棒を背中からはずして音でハウンドの位置と距離を把握する

鉄棍棒の射程に入った瞬間ハウンドを見すにそのまま鉄棍棒を振り

ハウンド一體をまとめて吹き飛ばした

吹き飛ばしたハウンドの近くに行き先ほどと同じように尻尾を切断して袋につめる

つめ終わった後周囲に何もないことを確認して岩までいこうと思つていた刀夜だがハウンドをすでに8体も倒しているのでそれなりに換金できると思いラズベールに戻ることにした

街道を歩きラズベールに戻ってきた刀夜は門でライズにもらった金属板を見せてすんなり通してもらいギルドに向かつた

ギルドの「報告」窓口に行き水晶に手を乗せ袋を渡す

「しばらぐおまちください・・・ハウンドの討伐依頼でしたね、8体の討伐という事なので銀板6枚と銀貨4枚です。ギルドランクはあと2回でロに上がります。それでわ水晶に手をお願いします」

水晶の発光が終わり銀板と銀貨を受け取り銀板3枚を腰の道具入れに入れておき残りを財布用につかっているちいさい袋に入れて窓口から離れる

Eランクの掲示板を見て出発時から新しいものがないか確認して特にないのでギルドを出る

今回の戦闘で武器に傷がないか確認してもらいに鉄棍棒を買った武器屋に向かつた

武器屋の主人にショートソードと鉄棍棒を渡して状態を見てもらった

「どうちも問題ないが手入れの仕方しつてるか?」

「わからないです」

武器屋の主人にショートソードの手入れの仕方を教えてもらい手入れの道具を銀板一枚で買う

鉄棍棒は手入れ不要で強いて言えば洗つて水分をふき取るだけしかし無料でやってくれた

武器屋の主人に礼を言つて武器屋からでて宿に帰りまだ日も落ちてないので鉄棍棒や防具をはずして町の散策にでかけた

第15話街の状況

初めてのギルドの依頼も無事に済ませ装備も外し開放的になつた刀夜は大通りにある店で食べ歩きができるそなものを探して歩いたしばらく周りの店を見ながら歩いていると焼き鳥つぽいものを売っている店を見つけた

「すいませーん、一本ください」

「兄さん、三本で銅貨1枚なんだけどいいか?」

「それじゃ三本で」

ズボンのポケットから財布(小さじ袋)をだしその中から銀貨一枚出して渡した

「おつりが銅貨9枚と・・・そのまま持つか?」

「そうですね、そのままでいいですよ」

おつりを先に貰い財布に入れてポケットにしまつた後焼き鳥つぽい物を貰つた

「いいで食べてもいいですか?」

「ああいーぞ、食べ終わつたら串をそこにぶら下がつてる袋にいれとこてくんな」

その場で食べていいと言われたのでその場で食べる

「うつまー、ビールほしー」

味がまんま焼き鳥と一緒にひつひつビールがほしくなつて言つてしまつた刀夜に

「そんなに喜んでくれるのはほれしひねえ、ところでビールつてなんだ?」

「ビールはお酒ですね、自分の故郷のお酒ですよ」

そういうて軽く流しながら袋に食べ終わった串を入れた

「おこしかつたですよ、いつまで売つてますか?」

「けつこつと遅くまで売つてゐるが、売り始めが曇すぎただけどな」

「わかりましたー、また来ますね」

「おへ、ありがとよ」

焼き鳥屋を離れ再び街を歩く

大通りはそれなりに人が歩いており立ち止まって眺めていられるような状況ではなかつたので気になる店があつても素通りした

道具屋、武器屋、防具屋は十字の大通り中心から各方向に一軒ずつあつたり宿屋、酒場、食材屋、食堂等もかなりの数あり高級そうな

所から大衆的な所まで色々あつた

そうやって今日は店には入らずどこにどんな店があるかを大体把握して宿に戻ることにしたが宿の食堂に日本酒に似たような酒があったのを思い出し焼き鳥屋に寄つて持つていた銅貨9枚分買ってから宿に戻り食堂で日本酒に似ている酒を1?ぐらいのガラス瓶と中身が水の同じ瓶とコップを貰い部屋に戻つて久しぶりの一人晩酌を楽しんだ

第16話 一日酔いイライラ

前日一人で飲んでいて一日酔いになってしまった刀夜は頭痛がする頭を押さえながら食堂に行き水を貰い一息ついたその時に

「すいません、トウヤさんでしょか？」

後ろから声をかけられて振り向くと衛兵が立っていた

「そうですけど、何か用ですか？」

「ライズ隊長が呼んでいますのでよろしければ今日中であればいつでもいいのでオランジ方面の門横の詰め所に来て頂けますか？」

「わかりました、一日酔いで今は辛いので落ち着いたら行きますよ

「ははは、わかりました、そう伝えておきますね、それでわ失礼します」

衛兵が食堂からでていき刀夜は一日酔いを鎮める為に果物を食べようと思ったのだが食堂には置いてないらしく宿を出て5軒横に店がある事を聞いて買いに行くことにした

宿をでてのろのろと頭を押さえながら歩いていたのがやはり大通りは人が多く四方から人の声がする

宿を出てまだ2軒ほどしか進んだが、一日酔いの刀夜は人の声が頭に響き気持ち悪くなり耐えられなくなりうすぐらい路地に

入つて休憩しようつと思ひ大通りの喧騒から抜け出した

そこでまつてゐた出来事に刀夜はイラライラを我慢できなくなり反射的に言つてしまつた

「こんなところで何してやがる……」つちは「口酔いでツレーのに馬鹿野郎が……」

大声を出して自分の声でまた頭痛がひどくなり気持ちも悪くてしゃがみこんだ

目の前にいたのは少女を壁際に押さえつけて何かしようとしていた男が三人

その中の一人が

「なんだテメーは、なめてんのか……」

そういうつて近づいてしゃがみこんでいる刀夜の腹に蹴りをいた

「うがあ・・・・・・・（ゲロゲロゲロゲロ）」

気持ち悪くて辛かつた刀夜は腹に蹴りをくらいその衝撃で吐いてしまつた

「」のぼけが「からんでくんじゃねえよ」

刀夜を蹴つた男は少女の方に戻つていく

「（ゲロゲロゲロゲロ）」

刀夜は胃の中が空になるまで吐いて頭痛も少しそよくなりスツキリしたが蹴られた事に対するイライラでプツツンする寸前だった

「おいそこの俺を蹴った奴、テメー！」
ちこちこやあーー！」

そういうて立ち上がる刀夜

「まだ吐きたりねえのか!!」

さつき刀夜を蹴った男が刀夜の方へ歩いてきた

刀夜の前に来て刀夜の顔面に向けて回し蹴りを放つ男

「オラア！！」

刀夜は男の蹴りをそのまま迎え撃ち蹴り足に向かつて拳を打ち下ろした

尋常じやない刀夜の力を受けた人間の足は膝から千切れて地面に叩きつけられた

男は地面に倒れながら叫んでいる

後ろで見ていた残りの男達は一瞬何が起きたかわからず啞然として

いたが仲間の叫び声により意識を取り戻し地面に倒れて叫んでいる
男を一人で抱えながら目の前の刀夜から逃げていった

逃げていった男達から解放された少女は刀夜に恐る恐る近づいてきた

「あの、ありがとうございます」

「え、何かした?」

「え・・・・・・」

少女は自分の事を助けてくれた刀夜にお礼をいったのだが帰つてきた言葉にがっかりしていた

それもそのはず、元の世界でもそうだが自分の窮地を救つてくれたはずの人間が自分を助けたことすらわかつていらない返事をされたら最初は白馬に乗つた王子状態だったのが一気にがっかりするのもうなずけるだろう

一方刀夜は本当にわかつておらずただ単にさつきの男達が騒いでいて頭痛がして休憩できなかつたからイライラの勢いで相手に怒鳴つて蹴られてしまい、イライラMAXのブツツン状態になつてやつてしまつただけで自分が少女を助けたなんて思つてもいい

「あなたがさつき追い払つてくれた男達に襲われた所を助けてもらつたの」

「ああ、そうだつたんだ・・・イテテテテ」

「蹴られたお腹が痛むんですか？」

「いや、一回酔いで頭が」

そういうながら頭を押さえる刀夜を見て少女の中の王子様は完全に消えていなくなつた

だが自分を助けてくれたことは事実で頭を押されて痛がつてゐる刀夜を置いていくわけにはいかないと思った少女は刀夜に

「ちょっとまつてくださいね」

そう言って大通りの方へ走つていった

刀夜は地面に座り頭痛が引くのを待つてゐた

数分すると少女が戻つてきて刀夜にフルーツジュースと水を持ってくれた

「お父さんが酔っ払つた次の日にこれ飲んで良くなつてゐから飲んでみて」

「ありがとう」

まずフルーツジュースを渡されてゆっくり飲んでいきコップを返して水をもらつ

水を一気に飲んで水の入つてゐたコップも返す

「ちょっとコップ置いてくるね」

少女はまた大通りの方へ走つていきちょっとするとまた戻ってきた

「そういえば名前教えてもらいますか？」

「刀夜って呼んでくれ

「トウヤね、私はヴァレリー＝エリアーヌ＝パンクラス、ヴァレリーって呼んで」

「よひしへヴァレリー

「よひしくねトウヤ

刀夜から手を出し握手する

最近来てしばらく町にいる事や料理がおいしいお店等を教えてもらつたりとのんびり話していると頭痛が少し治まつてきた

かわいい女の子としゃべつてしかもその女の子に親切にしてもうつてイライラも吹つ飛び体調も良くなつてきたのでとりあえず用事を済ます為に詰め所に行く事にした刀夜はヴァレリーに詰め所に行く事を伝え行こうとしたらさつきの事を言いに行くらしく一緒に詰め所に行くことになった

第18話 セーフ

二人で会話をしながら詰め所にたどり着いた刀夜は入り口付近にいた衛兵に声をかけようとしたが相手がこちらに気がつき声をかけてきた
「ヴァレリーちゃんじゃないか、久しぶりだね、ところで横の人
は彼氏かい？」

「お久しぶりカールさん、彼氏じゃないわよ、兄に用があつて来た
んだけどいますか？」

「ライズ隊長なら隊長室にいるよ、横の人も一緒にかい？」

「ライズに呼ばれて来たんだけど」

「ひょっとしてトウヤさんかい？」

「そうです」

「隊長から聞いてるんで案内します、ついてきてください」

刀夜とヴァレリーはカールの後ろについて詰め所の中に入つていった

詰め所はそれなりに広く玄関口を入つたらすぐに広い部屋があり食堂の用に長いテーブルが何個かあり壁際に各自の装備を置く木でできた長細い棚がある

一番奥の端に階段がありそこを上ると廊下に何個か部屋があり突

き渡たるとまた階段がある

一階は会議室と隊長の部屋で二階は衛兵達の仮眠室があるらしい

隊長室に着き衛兵がドアをノックする

「ノック」

「失礼します、トウヤさんとヴァーレリーさんを案内してきました」

ドアの向い側から

「はいれ」

ドアを開け中に入つていく衛兵に続いて部屋に入る

「カールありがと、戻つてくれ」

「失礼します」

カールは部屋から出て行きドアを閉めた

「トウヤ呼んでもまないね、ところでヴァーレリーがなんで一緒にいるんだ？」

「その事なんだけど、さつき大通りで買い物をしようと思つていたら男三人組にからまれて路地につれてかれたの、そこでトウヤが偶々来て助けてくれたの」

「本当か、トウヤ度々すまないな、妹を助けてくれてありがとう」

ライズが刀夜に頭を下げる

と刀夜が

「あの〜、結果的にはそつなんですけど、一日酔いで大通りにいると人の声が頭に響いて路地に入つて休憩しようと思つたときに三人組みがつるさかつたので頭にきてしまつて喧嘩になつただけで、ヴァレリーがいたことすら知らなかつたですし・・・」

「いや、妹を助けてくれたことに変わりはないし礼だけはちゃんと言つておきたい、ありがと」

「ところで、俺相手に怪我させちゃつたんだけど罪に問われるかなあ？」

「何もないよ、むしろ礼金でもださないといけないぐらいだよ」

「それならよかつた、けど礼金とか要らないからね、それより今日の用事はなんだつた？」

「ああ、とりあえず座つてくれ」

そう言われソファーに座る

「この前の人攫い、霧の団の事なんだが、この街にまだ数人潜伏しているらしいと情報が入つたのでそいつらがトウヤの事を聞いたら復讐にくるかもしれないから気をつけてくれって話だ、門での検問を強化しているから霧の団の生き残りが戻つてくる事もないと思うが一応気をつけてくれ、肩の刺青を隠して入つてきていればわからんからな、まあ厳重に検査はしているがね」

「兄さん、肩の刺青つてどんなの？」

「ん、ドリゴンをぼんやりとさせた感じのマークだな、そんなこと聞いてどうするんだ？」

「私を襲おうとしていた三人の内の一人にあつたような気がする。」

「何！？、本当か！」

「そのうちの一人はトウヤに足を折られてるからすぐに見つけられると思づわ」

ライズは立ち上がり衛兵を呼ぶ

呼ばれてきた衛兵に指示をされたライズが刀夜に

「トウヤ今日はありがとう、霧の団の残党を捕まえたら連絡するからその時はまた来てもらえるかな？」

「わかった」

「とりあえず今日は宿に戻つてくれてかまわないが万が一帰りに襲われるとまずいから一人兵士をつけるよ、ヴァレリーもな」

兵士が三人口て二人ヴァレリーに付き残りの一人が刀夜に付くらしい

「それじゃあトウヤまたね」

「またな、ヴァレリー」

詰め所の前で、ヴァレリーと別れ、ライズに付けてもらつた兵士と宿に戻り

兵士に礼を言つて刀夜は宿に入った

第19話朝から

朝起きた刀夜は顔を洗つて食堂に下りて行く

食堂に昨日詰め所で案内してくれたカールがいた

「カールさん、おはよう

「あ、トウヤさん、おはよう、昨日の事なんですが今大丈夫ですか？」

「いいけど」「じゃまあくない？部屋に行つたほうがいいかな？」

「できたらそのほうがいいですね」

「それはかまわないけどさ、カールさん朝飯食べた？」

「それがまだでして」

「じゃあ部屋に持つていけるもの頼んで持つていいつか」

刀夜は食堂のおばちゃんにサンドイッチを作つてもらつた

サンドイッチとコーヒーに似た飲み物を持つてカールを連れて部屋に戻る

部屋に戻りテーブルにサンドイッチとコーヒーを置いてイスに腰掛ける

「カールさん立つてないですかわりなよ」

「呼び捨てでいいですよ」

「じゃあ呼び捨てで呼ぶけどさカール無理してしゃべつてるでしょ、普段通りの話し方でいいよ」

「すんませんね、敬語は苦手で」

「はは、俺もそうだよ、なんちゃって敬語になるからね、まあどうあえず食べよ」

「じゃあ遠慮なく

一人はのんびりサンドイッチを食べコーヒーを飲んで朝の食事時間を満喫していた

「あのさカール、飯食べにきたわけじゃないしょ？」

「あーーしまった、えっと昨日の事なんですが、あの後すぐに薬や包帯等を扱ってる店や救護所、それに闇医者の所まで調べてすぐに三人組が見つかったのと、アレリーちゃんが確認もしたので間違いなく捕まえる事ができたから普通に生活してもらつて問題ないって隊長が言つてましたよ、後隊長が今回と前回と一度も助けてもらつたし礼がしたいって」

「そつか、すぐに捕まえられてよかつたね、いつもガールドの依頼こなして稼がないといけないし、はやく終わつてよかつたよ、それにしてもライズも固いねえ、前回はちやんと報奨金もらつてるし、今

回いらないつていつたのになあ」

「まあ隊長も妹を助けてもひつて何もなしぢや気になるんでしょ」

「じゃあライズに今度飯食わせてつて言つとこで」

「せせ、じやあもう皿ひておれやがよ、早く戻りなこと隊長の小皿をへりうそだ、それじや」

「ん、それじゃあ俺に飯付き合わされたって言つて、それじゃあな
あー

廊下をドタドタ鳴らしながらカールは急いで帰つていった

第20話 こなれて失敗

刀夜は装備を整えて、ギルドに向かつた

ギルドに辿り着きEランクの掲示板を見る

”ギルド連合 ラズベール周辺 ハウンド退治 ハウンド一休銀貨
8枚 詳細は窓口まで”
”ラズベール商人連合 ラズベール内 道具・防具・武器屋等配達
一日銀貨3枚+歩合”
”ラズベール防衛隊 ラズベール内 夜の町見回り 一日銀貨5枚
食事あり 詳細は窓口まで”

前回とまったく変わつてないのでまたハウンド退治に行くことにした

「受注」窓口に行き水晶に手を置き掲示板の紙を渡す

「ハウンド退治ですね、ハウンドの尻尾が証明部位です、何体でも
かまいません、3体につきギルドのランクポイントが一加算されま
す、どうされますか?」

「お願いします」

「でわ水晶にてを置いてください・・・いいですよ、部位証明用の
袋使われますか?」

「はい」

依頼の手続きを済ませて袋を渡してもらい、ギルドを出て前回と同様詰め所とは逆方向の門へ向かう

前回は途中で昼食等を買つていったが今回も宿を出る前に食堂で朝と同じサンドイッチを作つてもらい持つてきいていたので寄り道をせずに向かつた

門の衛兵にライズからもらつた金属板を見せすんなり通してもらひ前回ハウンドが出た所付近まで歩いてきた

辿り着いたはいいがハウンドが出てきたりしないので森付近をうろついていいるとハウンドが森から飛び出してきた

前回でだいぶ慣れていたので飛び出してきたハウンドを背中の鉄棍棒で弾き飛ばす

4匹までは順調に飛ばしていたのだが

調子に乗つていた事で隙がうまれ残りの一匹に躊躇つかれそうになるが強化されたスピードでぎりぎりかわして反射的にハウンドを飛ばしだが4匹と違い焦つた事で全力で叩いてしまつたので森の中に飛んでいつてしまつた

「あせつたあー」

刀夜は調子に乗つたことを反省しつつ

森の中に飛ばしてしまつたハウンド一体もつたないと想いながらうまいこと倒せた4匹の尻尾をナイフで切り落として、ギルドで貰つた袋に入れてハウンドの死体を一まとめにし、血の臭いにひかれ

てぐる奴を狩りうつと思い少し離れた場所でハウンドや他の相手をで
きそうな奴がくるのを待ちながら昼食を食べることにした
いふと

持つてきた水で手を洗つてからサンドイッチを食べのんびり待つて
森の中から2mぐらいの棍棒を持った人型の化け物がでてきた

第21話死にかけの

棍棒を持つた人型の化け物はゆっくり刀夜に近づいてくる

刀夜は立ち上がり鉄棍棒を構える

(今の力ならあの化け物の棍棒ごとこれでふきとばせるはず)

そう刀夜は思い化け物と正面から戦うことに決めた

ゆっくり化け物が近づいてくる

最初はゆっくりだった化け物の動きが段々早くなつていく

15m程離れていたがすでに10m程になつていて

さつき倒したハウンドで調子に乗つて反省したつもりになつていた
だけの刀夜は自分より大きい相手ですらこっちにきて強化され鉄棍
棒を振り回せる筋力に自身を持つていた

化け物は右肩に棍棒を担ぎ歩いてくる

刀夜は棍棒事叩き壊す氣でいる為下から上に振り上げるために下に

構える

化け物が2mまで近づいてきたところで化け物が棍棒を振り下ろしてくる

刀夜はその棍棒を迎え撃つ為下から一気に鉄棍棒を振り上げる

”ガギン”

鈍い音がして刀夜の鉄棍棒が吹き飛んでいく

「うあああああああ

刀夜は右手を押さえながら痛みのため叫ぶ

そんなことはおかまいなしに化け物は棍棒を振り上げる

「ガハ・・・」

化け物の棍棒を胸に受け刀夜は吹き飛ばされた

鉄の胸当てをしていたおかげでダメージは大きいながらも死ぬことはなかつた

刀夜は息が出来なく右手と胸の痛みも半端なものではないがこのままではじつとしていると殺されてしまうのがわかつている刀夜は必死で痛みをこらえて化け物を見る

吹き飛ばされたおかげで本当に僅かだが考える時間が生まれた

(いてえ、どうする？このままだと殺される、動けるか？足は問題ない、痛みで町まで逃げれそうにない、どうする？まず立ち上がることからだ)

「ぐいぐい

痛みを氣力で押さえながら立ち上がる刀夜

化け物は刀夜にかなりのダメージを『えて何とか立ち上がる程度だと思つてゐるようでのんびり近づいてくる

刀夜は動こうとするが少しでも力を入れると胸の痛みが響いてくる、右手からもすごい痛みが走つてくる

だが死ぬ可能性の方が高い今の状況で痛いから動けないなんて甘いことは言つてられない

化け物が近づいてきているがゆつくりなおかげで痛みを耐える覚悟を決めるには十分だつた

化け物が刀夜の頭目掛けて棍棒を振り下ろす

「くつ」

それを刀夜は痛みに耐えながら横に跳んでかわしながら距離をとる

距離をとり痛みを必死に堪えながら刀夜は呼吸を整えようとする

化け物は一瞬、獲物がまだこんなにも動けることに驚いたが見てみると苦痛に歪んだ顔を見るとしつ長くは持たないことを察したが早く仕留めようと走り出す

刀夜は呼吸をなんとか整えようとするが化け物が走ってきて棍棒を振り下ろしてくるのでまた横に跳んでかわす為呼吸を整える暇がない

横に跳んでよけるので化け物は横なぎに棍棒を振るう

刀夜は後ろに跳んでかわす

徐々に動きが悪くなつていく刀夜

それを全力で追いかけ棍棒を振るう化け物

このままだとあと数回しか持たない所で遠くから矢が飛んできた

第22話魔法（前書き）

大変間があきました
そして駄文ですみません
体調不良+仕事の急がしさ
そして地震の影響で執筆できませんでした
休みがないので中々考える事もできないのですみません
お気に入りをそのまま残してくださっている方
本当にありがとうございます

第22話魔法

ヒュン

ダッ

「ヴォアアアアアアアアアアアアアアア」

遠くから飛んできた矢は化け物の目に刺さつた

ブォン ブォン

化け物は痛みに耐えかね叫びながら棍棒を振り回す

ヒュン

ダッ

化け物の残っていたもう片方の目も矢によつて潰された

刀夜は痛みで我を失つている化け物から最後の力を振り絞つて距離をとる

「大丈夫か、少年」

いつの間にか刀夜の横には綺麗だが耳がとんがつた女性が立つていた

「ヴォアアアアアアアアアアアアアア」

化け物は叫びながらひたすらに棍棒を振り回している

「この町の近くにいなはずのオーガが何故いるんだ?」

刀夜の横に立っている女性がそう呟きながら『』構える

「とりあえずうるさいから倒しておくか」

そう言つなり女性の指が光つたと思ったら矢の先端に光が移る

「炎の精靈よ我を糧とし力を貸せ、フレイムアロー」

ヒュン

絞つた矢を放つた瞬間

矢が炎を纏つて飛んでいく

ダツ

化け物にあたつた時、化け物が火だるまになつた

そこで刀夜は意識を失つた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4580p/>

がんばれ元サラリーマン

2011年4月29日10時52分発行